

つて、彼等の側にとつて重用なる役割を演ずるに至るのである。

然し乍ら封建社會に、取つて代つた所の資本主義社會が僅か百有餘年の間に過去の一切の諸時代を合せたよりも巨大なる生産力を作り出した。之程の生産力が社會的勞働の胎内に眠つてゐやうとは如何なる前世紀の人々も豫想し得なかつたであらう。斯くも資本主義制度は歴史上に未曾有の文化を作り上げた。偉大なる功績を残したであるのに今や、自ら生み出した所の此老なる生産力と老なる人口とが自らの手と負へなくなつた。魔術師が自ら呪文を唱へて地下から呼び出した所の魔物を、自ら支配し切れなくなつたと同様に。斯かる經濟的生活條件の發展に對して果して精神力が之を止め得る所のタサビとなり得るであらうか。今や狂氣の如くになつて精神生活の強調が叫ばれる。然し乍ら一切の精神生活を現金勘定の水の中に溺らした者はそもそも何人であつたであらうか、自ら武器を作つて之を敵に與へ、今や自らの心臓に擬せられんとする時に當つて、其武器は偽物であるのだと言ふ事を主張する事に由つて、果して其手を止め得るものであらうか。

歴史は絶へざる發展である。歴史に停滯はない。而かも歴史は經濟的生活諸條件の基礎の上に發展する。發展は止揚をも其要素としてゐるものであると言ふ事を、しかど我々の念頭に置いて、歴史を靜視したい。(完)

## 企業問題を徹しての考察

經 三 石 井 泰

國民經濟の背骨であり又骨組でもあり物質文化の發展の爲に偉大なる力となり産業組織活動の勢力となり來つた企業も現代經濟機構の商文化と客觀的諸事情の許に於て今後其の窮局を打開すべき即ち救済すべきあまりに困難なる問題に喘に到つた。

抑も「企業は總ての他の社會制度と同じく又一つの歴史的產物にして幾百幾千年の長き進化發展史中の一經濟現象なり」と(坂西由藏著企業論)中に云われて居る。

現代企業も其の發達の中期に於ては總ての經濟組織の中に於ても重要な存在とし又支配者としての諸力を充分に持て居た。そして國民經濟の上にも重大性と重大生命を有し何れの企業も利潤の爲の投資源として活躍し、何らの危險すら感ずる者は無かつたかの如く見られて居た。不規則なる生産と極り無き生産の擴大及び自由競争の結果次第にその範圍も擴大し日に月に國內市場の狹隘を感じ無統制の内に發展し多大の利潤を擧げつゝ生産は少數の大經營の下に變遷した。一つの産業部門に於ける

獨占的經營と金融資本の時代への必然性を我々の前に展開した。そして企業其れ自体は獨立性を失ひつゝあり又完全に失た物もある。故に問題となるべき中心點に就て以下簡単に説明する。

過去に於ける企業組織の圓滑なる活動、例へば農企業に就て云ふならば、如何にして其の收穫高の増加を計るべきか？又は種子の良否の選擇を如何にすべきか又如何にして農業技術の進歩を計て行くべきかと云ふ問題が企業の形態——形態初期に於て非常に必要とされた又工企業に就て云ふならば如何にして良質の物資を市場へ大量的に生産し又如何にし多くの需要者の滿足を集めんとすべきかと云ふ問題が非常に必要とされた、又其の生産物も割合困難を感じずに販賣されて商品としての販路も相等あつた。(然し多少の競争は行はれたであらう！)成る程この點から考察すると直接人類社會生活の維持發展に大いなる好影響を與へて居たとも云へ得る。然し資本主義の高度化と共に企業其れ自体の問題とすべき事はそうした技術的側面或は人間生活の維持發展と云ふ方面等は何處へか影を消し如何にして生産の合理化を計り、如何にして自由競争の制限を計らねばならないか、又弱少企業は絶えず金融資本の支配よりののがれんとし、大企業は如何にして生産の制限を計らねばならないかの問題が起て來て居る。故に前者初期の企業狀態から後者中期以後の狀態への問題の變化が行はれた。

勿論此の如き事情の中に於ても各企業は日々金融資本の重壓の爲利潤の追求、市場獨占生産技術の改良又は自由競争への矛盾の擴大は續けられて居るが然し企業利潤の行方をはつきり知る事と又その擴大は常に金融資本の重壓下に於て企業形態は單なるロボット化しつゝある事を知るのである。要するに企業自身の問題とする處が初期に於けるが如き目標とは異り次第にそれが擴大され、企業の中心點が變つて行た其の事なのである。

從て我々の研究せんとする材料も其の意味に於て常に其の動き物の中に在り注目すべき課題はその範圍の内に置かれて居るのである。其れを体系付ける事こそ經濟學の最も意義ある重要な任務である。

「今日の企業の生産計畫の直接の目標として居る處は市場に於ける販賣であつて配給計畫も市場に於ける賣買仲介を目標とするのである。從て斯る企業經營は其の時に於ける市場價格の順應及び支配が直接目的である」——「高瀬莊太郎著企業財政論」中に云て居る。

此處に於て問題となのは市場價格に順應するのは弱少中小企業であつて常に大量的生産を行て居る大經營企業が決定的價格上下の獨占者であり經營技巧は市場に流出する生産物量の變化に應じて生産物量の調節を行ひ其の根本問題は市場價格の順應では無くして市場價格の獨占

を目標とする經營計畫が存して居る。需要供給の關係の重大性に於て其の關係を人爲的技術に依て調節せんとする形態、組織が獨占の根本なのである。

即ち市場價格其の物は總ての自然的法則を無視して目的の爲經濟的なる手段が企業經營の根本問題であり企業利潤獲得は、市場の金利歩合より大なる利益を擧げんとする處から生じて来る。

例へば農企業の生産物は一時にその季節に於て大金融資本の許に相等低下なる價格に依て集收され其の收集の場合に於て大資本を有する純然たる商企業會社に手に於て行はれる。そして市場價格の支配は直接生産企業では無く配給組織としての單位の商企業に依て行はれるのである。

故に資本主義企業は原料及び勞働量乃至生産物量等を考慮して實行されて居るもので無く又其の配給計畫も物資の直接必要に従て配給せんとする計畫に依るものではない。故に物資の市場價格に従て其の高き方即ち原則的に競争の少き方向にと流動して行くのである。

其れが爲に生産の遅々たる場所への商品の流動又は市場の獲得の爲の各國の猛烈なる經濟戰、自國內の市場の擁護を關稅壁に依て外國商品のボイコットと共に生産物は商品としてのダンピングに依て世界市場を目指してその支配的地位獲得の前進が展開されるを見る。

實に資本主義企業の生産及び配給の計畫を規定する處の理論及び法則は物理的、心理的、生理的の諸法則とは何ら關係無く生産されて居るのである。

例へば一定の物質が人間の慾望を充足する關係は人間の生理的或は心理的法則に依て規定され測定されて居るが、一定物資が如何なる價格を以て賣賣されて居るか云ふ關係は決して人間の生理的又は心理的法則に依て規定され得ない。價格其の物を説明せんとするに當りて自然的別個の法則に依て測定され得べき物ではない。

資本主義企業を直接規定すべき獨自の一原理即ち人間社會生活に於ける特殊の形態に基くものであつて、直接各個人を規定する自然的なる諸法則を無視して市場なる社會制度を媒介して行はれる現代經濟機構の所産に他ならないのである。

以上述べたるが如く自然的諸科學の對象となる自然現象とは根本的に相違する處の現象が社會生活に依て生成されて行くのである。

之等自然的諸科學の原理とは別個に人間社會經濟生活に關する科學が構成される所以である。

各個人の經濟生活即ち今日の社會生活も商品賣買制度に依る物資の市場價格に依て規定され又弱少企業は常に其の市場價格の動きに依て規定されて居るのである。故に國民の購買力の減少は直接弱少企業の上に大なる影響

が起るのである。

商品としての生産物に就て市場を中心として起る價格を研究せんとするならば、富その物の存在金融資本を無視しては容易に説明する事は出来無いのである。

過去三十年間に渡つて目醒しき發達を續けて來た我國の營利企業も歐米の産業の獨占化、統制化の後を受けて最近に到りて著るしく統制化(獨占化)が顯著になるに到つた。

即ちカルテル、トラスト、コンフェルンの如く競争會社の橫斷結合、縱斷結合、或は遡つて原料を支配し或は前進して交通機關としての船舶、ドック、鐵道、背後に於ける金融資本との結合等、夫れである。

現代に於けるが如き獨占体は過去の我が國の經濟史上に於ても組合的なる組織として存在して居り、又半封建的なる力に依て支持されて居る事もあつた。夫等の形態を現代企業の形態とを比較する事は非常に興味ある問題であると思ふ。明治時代に及んでの獨占形態は一時的なる物又一、二の貿易の爲の都合的組合か又は季節的の市場の支配を目的とした物であつた。勿論現代企業の有するが如きその背景としての巨大なる金融資本を持て居る處の組織とは自ら異つた内容を持つものと考へられる。即ち夫の目的に於ても發生の理由に於ても作用に於ても形態に於ても著しく相違があつたのである。

此處にメツツナアの過去の獨占形態と現代企業の獨占形態との比較を記著する。

前もつて此の説明は充分と見る事は出来ないが——  
イ初期資本主義の獨占体は主として奢侈品——多くは外國から輸入された商品を大商人が取扱た處の——に限られて居たが今日では廣く重工業を中心として普及して居る。

ロ前代のものは極く少數の王權諸公の間に組織されたものであつたが今日の如く多數の競争者の間に組織され創立又は支持の狀態も當時の物とは比較にならない事、前代の物は主として商人的投機的であるのに反して今日のは大工業に行はれてゐる事。

ニ自由競争の經驗と大工業の特性からの見解よりしても今日のは著るしく高貴である。

ホ前代のものは諸公の特權で法律的に支持されたが今日では主として資本力と智力とで支持される事。

ヘ前代のものゝ動機は當時の王侯の財政的必要があつたが今日では専ら資本家の利潤慾に基て居る事。(以下省略)

此の比較は大體参考とはなつたが前代及び現在經濟機構の完全なる分析に依るものではない。

フオゲルシュタインは一八六〇年頃から資本家的獨占形成があつたと云つて居る。



その最初の發展期は一八七〇年の國際的不景氣と共に始まり一八九〇年の始めまで續いた。その特徴は一時的及景氣的カルテル並に本來ならば競争の激しかりそうな時期例外に二、三の強固な組織が創立された事があつた以上を第一期とする。

第二期に入ってから獨占は豫期以上の擴張を遂げた。それは既に工業の一半を支配し又組織形態の或る終點に迄で入た(一九一四年頃を云ふ)……國內市場獨占の終結。

第三期に入からは經濟的及び國家的經營に於て、資本家的獨占の完全なる排列が行はれ、種々經濟的及び政治的原理の實行圖が行はれた……(國際市場への發展)——「小島精一著・企業集中論」

以上の比較より大体の相違は見出される事と考へる。

前代の獨占組織に就て具体的に見るならば、我が國の輸出組合特許組合等々……我國の經濟組織は何時にても歐米より遅れて居る事が分る。又歐洲に於けるコーナー(Corner)とかリング(Ring)とか呼ばれた商品買ひ占めの團體中世のツunft(Zunft)も一種の特權的獨占体であつた又重商主義時代には特許會社なる公許獨占体が盛んに活躍した時もあった。

現代的獨占化の現象を理解せんが爲には自由競争を通してその下に於ける生産力の膨張——競争の——普遍的尖鋭化——恐慌——金融資本の動き等を経て之を克服せんとしつゝある中小企業及び其の渦中にあつて常に支配的地位を確立して行く大企業の狀態即ち企業の集中化とを考察し最高段階としての各種産業部門に入り行く金融資本の發展を見るのである。又擴大され行く市場は廣く國際的にのび、限り無き材料を研究の對照となす事が出来るのである。(1933・3・10)

## 英國關稅ノ部分的考察

經 二 秋 山 正 明

(一)自由ヨリ保護ヘノ移行過程。

(二)保護政策下ノ一現象。

(三)特惠制度。

(一)保護主義ヨリ自由主義ヘ、然シテ再ビ保護主義ヘ。此レガ英國貿易政策ノ十七世紀中葉ヨリ現在ニ至ル期間ノ經路デ有ル。勿論初期ノ保護貿易ト現ノ其レトハ甚ダシク性質ヲ異ニシテ居ル事ハ云フ迄モナイ。

十七世紀中葉カラ十九世紀初頭迄、此ノ期間ガ初期ノ保護政策ノ時代デ有ル。此ノ時代ハ當時ヨーロッパニ於テ海上ノ霸權主タル、オランダニ對シ英國ハ自國貿易ノ發達ノ擁護上、航海條例(Navigation Act)ニ依ル完全ナ

ル保護政策ヲ採ツテ居タノデアル。

其ノ後國內工業ノ發達、殊ニ製造工業ノ大ナル發達ニヨル新市場ノ要求ハ、一八二二年ヨリ一八二六年ノ間ニ行ナハレタル關稅改正、一八四二年ノピール自由貿易法(Peel's Free-trade Act)等ト共ニ保護貿易ヨリ自由貿易ヘノ移行ノ氣運ヲ起スニ至ツタ。然シテ一八四六年ノ穀物條令ノ廢止ニ至リ遂ニ自由貿易ハ確立サレタノデ有ル此ノ時ヨリ一八三一年十一月ニ至ル百年ニ近イ期間ガ即チ自由貿易ノ時代デアル。然シ自由貿易ノ完全ニ行ナハレタノハ、一九一四年即チ大戰前マデノ約七十年ノ間デ戰後ヨリ一八三一年ノ期間ハ半自由貿易時代ト見ルベキ時代デ有ルト思フ。

戰時英國ハ非常時政策トシテ、戰時保護政策ヲ行ツタ此レハ輸出入ノ禁止及制限、並ビニ食料品及原料品ノ管理統制ヲナシ、依リテ戰爭ニ對スル物資供給ノ圓滑ヲハカツタノデ有ル。此等ノ戰時ニ於テ行ナハレタル貿易統制ノ手段ハ戰後ノ政策ニ重大ナル影響ヲ及ボシタ。戰後撤廢セラル筈ノ前記諸制度ハ、カヘツテ平時ニ於ケル保護政策ノ基礎ヲナス原因トナツタノデ有ル。其ノ最初ノ現ハレトモ見ラレルモノガ即チ産業保護法デ有ル。

此ノ法案ハ英國ノ特定産業ノ保護ノ目的ノ爲メニナサレタルモノデ大体次ノ三部カヲ成ツテ居ル。

(一)樞要産業ノ保護。

(二)不當廉賣ノ防止。

(三)一般通則。

其ノ後毎年各種ノ關稅改正ガ行ナワレタ。次ニ其ノ大略ヲ記スルト即チ

一九二五年 マツケナ關稅ノ復活。

絹織稅ノ創設。

帝國特惠關稅ノ擴張等。

一九二六年 自動車關稅ノ擴張。

特惠關稅等。

一九二七年 絹絲及人絹ノ戻稅、

タイヤーノ免稅撤回等。

一九二八年 機械的点火器及構成部分品ノ關稅設定。

炭火水素油ノ關稅設定、玻璃磁器關稅ノ設定等。

一九三一年 トーキーヒルムノ關稅引上、

砂糖輸入稅ノ引上及ガソリンノ新稅率設定。

コ、ノ調製品ノ輸入稅率引上等々、デ有ル。

斯クシテ一九三一年十一月ニ至リ所謂非常輸入法ノ設定ニ依リ遂ニ英國ハ百年來ノ自由貿易カラ保護貿易ヘト完全ニ移ツテシマツタノデ有ル。